

ムソルグスキー 展覧会の絵



ムソルグスキー
(イリヤ・レーピン画)



キエフの大門
(ハルトマン画)

1. ムソルグスキーの生涯

1839年 3月21日、ロシアのカレヴォに生まれたモデスト・ペトローヴィチ・ムソルグスキーは幼くして母親からピアノの手ほどきを受け7歳にはリストの小品を弾いたとされています。10歳になるとペテルブルグの軍学校に入学すると同時に音楽教師のもとでピアノを学びます。しかし、ピアノ以外の音楽理論などの教育は施されませんでした。これ以降正規の音楽教育を受けたことは生涯なく、個別に助言や影響を受ける程度であったためムソルグスキーは絶えず自己の音楽上の訓練の欠落への不安に悩まされることになります。

その後ムソルグスキーはペテルブルグの近衛士官学校に入学し、優れたピアノ奏者としても有名な生徒となります。卒業すると近衛旅団に配属され、そこでのちに『ロシア5人組』で共にするボロディン、バラキレフ、キュイなどに出会います。



左から ボロディン、バラキレフ、キュイ、R=コルサコフ

その後軍隊を離れ作曲に専念するようになりますが、その頃からムソルグスキーは神経を患うようになります。1860年21歳ころの手紙には「5月から8月のほとんど期間、私の頭は弱り、激しい興奮状態になる」と書き、神経の過労からくる抑鬱、倦怠などの症状に悩まされます。その後『ロシア5人組』での音楽活動は活発化し、一方、生活のために役所に勤め始めます。

しかし、26歳の時に母親を亡くしてからアルコールに強く依存するようになります。ムソルグスキーは代表作である交響詩『はげ山の一夜』(1867年)、歌劇『ボリス・ゴドノフ』(1872年)、『展覧会の絵』(1874年)などを作曲しますが、1877年頃から神経性の熱病や不眠症、鬱病などに悩まされるようになり、1881年2月に発作を起こして入院、3月28日に肝臓病、心臓肥大、脊髄炎などを併発し入院した病院先で死去します。

享年42歳。イリヤ・レーピンが描いた有名なムソルグスキーの肖像画はこの入院中に描かれたもので、創作意欲は漲っているものの肉体的にかなり疲弊している姿をよく捉えていると言われています。

ムソルグスキーの死後、ロシアでは彼の名は忘れられ作品が演奏されるのは稀でした。しかし、1874年にサン＝サーンスが歌劇『ボリス・ゴドノフ』のピアノ譜をフランスに持ち帰ったことがきっかけとなってフランスでムソルグスキーの名が知られるようになり、いくつかの作品が紹介されます。特に、ドビュッシーとラヴェルがムソルグスキーの音楽を高く評価し、その影響をドビュッシーは歌劇『ペレアスとメリザンド』、ラヴェルは歌劇『スペインの時』や歌劇『子供と魔法』などに反映させます。そして何よりラヴェルはムソルグスキーのピアノ曲『展覧会の絵』を見事にオーケストラ編曲することになります。